

特集

漁師たちのアジア

本当の豊かさは足もとの浜にある

燃料の高騰、安い魚価、資源乱獲と漁獲量の減少などなど、漁業をめぐる環境はきびしい。日本ではこの夏、史上初めての一斉休漁、漁師のゼネストが行われた。自由貿易体制のもとで魚市場もいまや世界市場に統合され、近代的な設備を駆使する大資本が牛耳っている。その一方で、浜に生き、地元の家と共生しながら生きてきた漁師は、追いつめられながらも足もとから新しい仕組みを積み上げてきている。そんな漁業の実情を追った。



日本では2歳以下の小型サバばかりで、大部分は飼料や缶詰に仕向けられている。要するに、日本の漁業はサバが成長するまでに獲ってしまい、資源の再生にも強い圧力をかけて続けている。一方、ノルウェーでは日本市場の大型サバ需要に適応したサバ漁業を展開しており、市場占有に成功してきた。こうした自国の資源を安値で食

日本の漁業と漁師たち

鷺尾圭司／わしお・けいじ
京都精華大学教授

1 日本の漁業の現状

2008年7月15日は日本の漁業史上初の全国一斉休漁が行なわれた画期的な日として記憶される。日本においては、自然を相手にする漁業には「盆も正月もない」という感覚があり、また水産資源は先に獲った者に所有権が生じる

をあえて休漁に踏み切らせたものは「漁業の危機」がすべての漁業者の共通認識になったからに他ならない。漁業危機の直接の引き金になったものは、国際的な原油価格の高騰による石油製品の相次ぐ値上げによる経費の増大だった。今日の漁業は、石油がなければ漁労も養

殖も流通もままならない石油依存体質になってきたわけだ。また、原因は石油だけでもない。水産物の価格決定権を川下の流通業界に握られ、漁業は適正なコストを価格に転嫁できない状況に陥っていた。それは、漁業者にも水産行政にも、漁業生産にばかり目を配らなかつたこと、価格の低下を漁獲の量で補うという資源管理をないがしろにした場当たり主義があつたからである。さらに、食糧危機が取りざたされる昨今に

2 日本の漁業体質の事例

日本の漁業体質を現す代表的なものにサバがある。70年代には400万トンの漁獲を誇った日本のサバ漁業も、環境変化や乱獲がたたって90年代以降は数十万トン水準で推移している。しかし、低迷しているとはいえ60万トンもあれば日本の消費市場にも出回ってよいもののだが、日本市場に見られるものはノルウェーから輸入された大西洋サバが大半を占める。

日本で漁獲されているサバの大部分は2歳以下の小型サバばかりで、大部分は飼料や缶詰に仕向けられている。要するに、日本の漁業はサバが成長するまでに獲ってしまい、資源の再生にも強い圧力をかけて続けている。一方、ノルウェーでは日本市場の大型サバ需要に適応したサバ漁業を展開しており、市場占有に成功してきた。こうした自国の資源を安値で食

未来を切り開く国境を越えた連帯

水原博子／みずはら・ひろこ
日本消費者連盟事務局長、APLA評議員



最近、田坂興亜さんから聞いた話。田坂さんは外務省の「食料増産援助」と称した途上国への農業輸出を停止させたり農業学者として活躍されています。今年の4月7日〜12日、南アフリカのヨハネスブルグで開かれた国連関連の、特に飢えの問題を解決するために、農業に関わる知識、科学、技術の評価を協議する国際会議にNGOとして参加されました。政府と市民社会それぞれの代表30人ずつが基本方針を固め、1月には報告書(案)と提言書(案)が完成したそうで、その内容はかなり「革新的」で化学企業の代表者たちは最終段階で会議をボイコット、日本政府は誰も参加しなかつたとのことでした。

市民社会を代表する団体は「工業的、エネルギー多消費型の、また毒物を使用するようなこれまでの農業の常識的な考え方はもはや過去のものとなった」と提言の早期実現を呼びかけたといえます。WTO閣僚会議の市民抗議による破綻クラスの出来事ですと日本社会にも伝わりやすけれども、南アフリカで激しい議論の応酬があつたというこのような出来事は伝わらず、市民や農民、労働者、NGOなどが参加、実践している「もう一つの道(オルタナティブ)」への挑戦は報道される機会はなかなかありません。しかし、参加した市民団体によって、田坂さんが私たちに報告してくれたような形で、経緯を共有して未来を切り開いているという確信があります。それも国の境を越えた広がりを持つ連帯が、遺伝子組み換え食品反対運動を例に取り上げてみてもめざましく進んでいるといえます。

「食べ物を私たちの手に取り戻そう」と、消費者と生産者の提携を久しく呼びかけてきました。先述した南アフリカの報告で、市民団体は「小規模農家を中心とした農業生態系を活かす農業こそが事態を良い方向に一歩前進させる鍵となる」といっています。

「ポコポコ」は「サンゴ礁の満潮」をイメージしています。潮が満ちていくにつれ、サンゴ礁のあちこちに「ポコ」(水たまり)が現れて、ポコポコ同士がつながり始め、いつの間にか一面海になるというイメージです。アジアの各地域で「ポコ」が生まれ、気がつけばつながっているような活動をしていきたいという思いがこめられています。

CONTENTS ■ HALINA 02 2008.11.01	
02	Relay Essay ポコポコ② 未来を切り開く国境を越えた連帯◎水原博子
03	【特集】漁師たちのアジア—本当の豊かさは足もとの浜にある 日本の漁業と漁師たち◎鷺尾圭司 REPORT 神奈川の漁村に行ってきました。◎吉澤真満子 風と月を頼りに生きる漁民たち—フィリピンネグロス島の漁村から◎大橋成子
08	Topics アジアの若者と“農村再生”について考える—Rural Regeneration in Asia◎吉澤真満子 伝えてきた暮らしを实践する権利を先住民から奪う—先住民サミット・アイヌモリからの報告◎倉戸ミカ
10	堀田正彦のアジア食倒れ② フィリピン家庭料理の女王『レリアノン・バングス』◎堀田正彦
10	むらを歩く② 明日 むらがなくなっても◎大野和興
11	あっちこっち雑学手帖② とりあえず、『チャプスイ』!◎松田麻衣子
11	じゃらん・じゃらんアジア② 時速50キロで疾駆する鳥ヒクイドリ◎村井吉敬
12	撮っておきアジア② 中国河北省◎笠原光
13	APLA生活② ap bank FES'08でバナナ売り◎荻沼民
14	Voice from APLA partners 【北部ルソンより】北部ルソンにおける鉱山開発問題に関する報告です。 【東ティモールより】エルメラ県ファトゥベシのコーヒー農園における土地問題の話が届けました。
15	事務局便り

表紙のことば

フィリピン南西部のスルー諸島に浮かぶ島バシラン。紺碧の海と険しい山に囲まれたこの島には、独自のアニミズムと14世紀に到来したイスラム信仰を同時にもつヤカン族が多く住んでいる。海岸線には、「海のジブシー」とよばれるサマ族(バジャウ)の集落が連なる。しかし、こののどかな島は01年、9.11以来、「恐怖の島」に化した。バシランを拠点にするイスラム過激派組織アブサヤフがアルカイダと関係しているという理由で、米国はアフガン侵攻後バシラン島で軍事作戦を展開。人口30万人の島にフィリピン国軍6000人と660人の米軍を配備した。私は03年に初めてバシランを訪れ感動したのを覚えている。どんな戦争状況の中でもヤカンの私たちはスルー海のような色鮮やかな伝統布を平和を祈りながら織り続けていたからだ。(大橋成子)

REPORT

神奈川の漁村に行ってきました。

吉澤真満子 / よしざわ・まみこ
APLA事務局長

日、神奈川三浦市と横須賀市を

訪れた。食にまつわる問題が相次ぐ。昨今、日本の漁業の実態があまり見えてこない。漁村の現状はどうなっているのだろうか。

漁村は今

横須賀市長井町。第一印象は、人がいない。外は暑いし、市は終わっているだろうから、表に人がいないのは当然かもしれない。しかし、かつてはコーヒーショップ

や映画館があったというメイン通りは今やその面影もない。

漁協女性部会長の川名正子さんに話を聞く。「ここもさみしくなつたわね」。都心が近いため若者は町を出て行ってしまった。最近では魚が減り、昔獲れていた魚がいなくなった。そこに燃油代高騰が追い討ちをかけ、遠方に出る漁は厳しい状況だ。漁業を生業にすることは、サラリーマンのように

毎月給料が出るわけではなく、どれだけ漁獲量があるかだ。大漁の時には町でも金が回り活気づく。しかし、反対もあるわけだ。

隣の佐島町も訪れてみた。ここは2000年以降、タコやアワビがブランド化され有名になった。しかし、もともとは、カタクチイワシを、カツオ船の餌として販売し栄えたところ。80〜90年代は景気がよく、一度都市に出た若

には、やはりまともな漁業とまともな魚食文化を育てたいと努力している動きもある。一例を挙げると、瀬戸内海東部の明石海峡を中心とするイカナゴ漁業がある。

イカナゴは今日では明石・神戸の名産品として「イカナゴのくぎ煮」が有名で、毎年3月には魚屋に行列ができ、家々でイカナゴを煮るにおいが町中にあふれ、全国に宅配便が季節の便りとして運んでいく風物詩にもなっている。しかし、このイカナゴは25年前までは養殖魚のエサや畜産飼料としてキロ30円ほど売られていた。つまり食用仕向けにはほとんど当てにされていなかったものだ。しか

し3千トンも獲れば、何がしかの収入になるので、競って獲りに行っていた。

ところが、明石海峡あたりで獲れるイカナゴ資源は、半分以上が岡山県方面の備讃瀬戸からもたらされるもので、海砂採取が盛んに行なわれたために砂地に住み着くイカナゴが激減してきた。そのおりに明石のイカナゴ漁獲も目に見えて減り、大漁貧乏傾向が強まってきた。

そんな時に、漁協の婦人部などが編み出して普及を図った「イカナゴのくぎ煮」が新たな価値を生み、イカナゴ漁業の再生を果たすことになった。漁業の側も、食べ

てもらえることによる価格上昇にあぐらをかくことなく、資源を持続的に利用できる水準で漁獲を規制し、乱獲にならないように努めるようになった。今日ではエサ需要などの非食用仕向けはわずかになり、食用仕向けになった上に、季節の風物詩として地域の人が競ってくぎ煮を炊き、全国の知り合いに送ることとなり、価格もキロ数百円から時には千円を越えるところまで人気を呼んでいる。

5 「旬産旬味」の関係

水産物の価格というものは、見た目と安さばかりで売るのはなく、地域の環境と結びつき、持続

的な生産を維持する漁業を応援し、食文化を伝えるものとして暮らしに溶け込ませることによって、大きな付加価値をよび、このように価格を変えてしまうことができるものだ。

これからの漁業を考える上では、人びとが魚を食べ続けてきた地域の食文化を取り戻し、大切に食べる姿勢を持つことが欠かせない要件だ。それを可能にする考え方は「地産地消」をもう一歩進めた「旬産旬味」であろう。これは、地域エゴとしての地産地消ではなく、旬のほんものの味を味わう生産のあり方であり、旬を味わう消費者が支えるという関係である。■

いつぶし、外国から食糧を輸入するというスタイルが日本の水産政策である。そして大中型まき網という乱獲体質の漁業利権を手厚い補助金で温存し、沿岸の零細漁業を困窮に追い込んでいる。

世界の人口は65億人をこえ、2030年には80億人になるという予測もされている。食糧生産は頭打ちになりつつあり、これ以上の供給は困難ともいわれる。食糧危機は地球上のいくつもの場所ですでに始まっている。それは食糧生産量を人口で割った一人当たりの配分を見積もっても始まらない。食糧問題は、国際的な配分の有り方の問題になっていくからだ。

牛肉を食べることは、その十倍の穀物を消費することであり、マグロを食べることは、その十倍のイワシを食べることになる。これが食物連鎖を通じた生物生産の仕組みで、豊かな人びとが、より豊かだと思ふ食事を進めると食糧不足はより一層深刻になる。

食糧危機を人類全体の問題として捉えるなら、先進国や途上国の富裕層は「まともなものを、ほどほどに食べる権利と義務を有している」ことを忘れてはならないだ



朝、漁に出ている船が帰ってきた。

へ的大量流通に支配され、それまでの地域消費を支えていた魚屋が減少したことも、魚の販路が限定される結果を生んでいる。このため、日本の漁業者の多くは沿岸漁業に従事してきたが、漁獲量の減少と販売額の低迷、経費の増大などの経営難に陥り、後継者難など漁村社会の崩壊も招いている。

しかし一方で、沿岸の待つ漁業は、無駄なエネルギーを使わないし、来遊する資源を最大限活用するための付加価値をつける努力を惜しまないことから、高品質な食材提供につながるが見られる。サバでいえば、関サバなどが有名で、資源管理と品質管理を徹底したブランド化戦略が高級魚としての地位を築いている。また、後述する筆者のかかわったイカナゴのくぎ煮は、飼料用であった小魚を食用に仕向け、郷土食として地域住民の支持を得ている。このような地域漁業の成功モデルはあるものの、あくまで少数である。

また見方を変えると、

日本の沿岸に張り付く沿岸漁業は、零細とはいえ漁業権を持ち、漁村を中心とする地域社会形成に大きな役割を果たしてきた。しかし、国土開発により利益を得る政治勢力に発展することは「抵抗勢力」の育成に他ならないもので、その衰退策が政策的に行われてきたと考えることもできる。

4 グローバル化の中の小漁師

日本の漁業生産の現場では、いま国内市場で売れないものを輸出していかうという動きが進んでいる。先のサバの事例のように、乱獲を重ね、小型魚しか獲れない状況に反省することなく、それをより補完する売り先を求める動きである。これは、海は奪うところだという発想でしかなく、国際社会に対して食料資源を有効利用しなければならぬという世論に逆行しているといえる。そうした水産政策のもと、困窮する漁業現場では価格決定権を持つ流通業界に対抗する術はなく、わずかな価格差を求めて右往左往しているという状況でしかない。

しかし、地域の小さな単位の中

3 崩れる漁村社会

日本の沿岸漁業が困窮するのは、来遊する魚群を待つ漁村の目の前の沖で、煌々と集魚灯を照らして魚群を集めて根こそぎ獲っていく大中型まき網に資源を横取りされていることも大きな原因になっている。また、魚の流通がスーパー

への大量流通に支配され、それまでの地域消費を支えていた魚屋が減少したことも、魚の販路が限定される結果を生んでいる。このため、日本の漁業者の多くは沿岸漁業に従事してきたが、漁獲量の減少と販売額の低迷、経費の増大などの経営難に陥り、後継者難など漁村社会の崩壊も招いている。

しかし一方で、沿岸の待つ漁業は、無駄なエネルギーを使わないし、来遊する資源を最大限活用するための付加価値をつける努力を惜しまないことから、高品質な食材提供につながるが見られる。サバでいえば、関サバなどが有名で、資源管理と品質管理を徹底したブランド化戦略が高級魚としての地位を築いている。また、後述する筆者のかかわったイカナゴのくぎ煮は、飼料用であった小魚を食用に仕向け、郷土食として地域住民の支持を得ている。このような地域漁業の成功モデルはあるものの、あくまで少数である。

また見方を変えると、

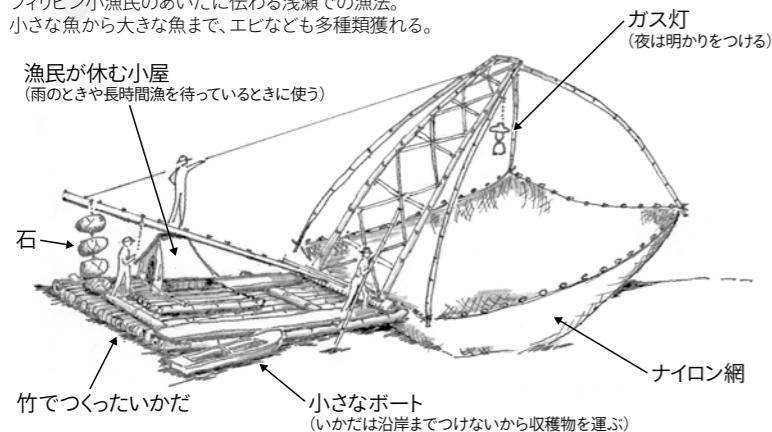
4 グローバル化の中の小漁師

日本の漁業生産の現場では、いま国内市場で売れないものを輸出していかうという動きが進んでいる。先のサバの事例のように、乱獲を重ね、小型魚しか獲れない状況に反省することなく、それをより補完する売り先を求める動きである。これは、海は奪うところだという発想でしかなく、国際社会に対して食料資源を有効利用しなければならぬという世論に逆行しているといえる。そうした水産政策のもと、困窮する漁業現場では価格決定権を持つ流通業界に対抗する術はなく、わずかな価格差を求めて右往左往しているという状況でしかない。

しかし、地域の小さな単位の中

Salambao (サランバオ) 漁法

フィリピン小漁民のあいだに伝わる浅瀬での漁法。小さな魚から大きな魚まで、エビなども多種類獲れる。



中央部にあるサン・エンリケ町の漁村ナヨン。フィリピンの各地で見られる典型的な零細漁民の村だ。マングローブ森に囲まれた村に

「今日はラッキーだったが、明日はこうはいかないよ。毎日が博打のようなものさ。」
ここはネグロス西州

海とマングローブがあれば
昨今、世界を襲っているガソリンや米・食糧の暴騰は、この小さなナヨン村の人びとの生活をも脅かした。しかし、海で生きる人

「怠け者」「原始的」「貧しい」と蔑むが、ナヨン村の生活を観ていると、最後まで生き延びる知恵を持っているのは、実はこの村の人たちではないか、という気がしてくる。■

カニを獲る竹のかご、釣り竿、魚網、そして深い海へもぐり3キロもの魚を一突きするバスライ。一見ライフル銃のような木製の銃身の引き金を引くとナイロン糸が括りつけられた、先の尖った50cm程のステンレス芯棒が飛び出し魚を仕留める。ポボイ特製の道具だ。

「今日は網をかけても小エビは獲れない。もぐった方がよさそうだ。」とポボイは薄い木製のひれ足と水中眼鏡をひよいとつけてバスライ片手に夜明けの海に沈んでいった。水深5メートルまで5分間もぐることができるとい

は300家族が住む。ほとんどが「リミジヨ・ヒネラル(日々の稼ぎで生きる)」と呼ばれる人たち。魚が獲れない日は、ありつける仕事に転身して日銭を稼ぐ。

びとの暮らしの工夫はしたたかであり、町で魚を現金に変えるだけではなく、農村を廻り米や野菜と物々交換を始めた。余った野菜を家の軒先に並べた八百屋もどきまで出現している。キトイの妻ロライは5人の子持ち。小学校に通う孫3人の面倒も見ている。「ここでは生活は貧しくても、米さえあれば何とか生きていける。子どもたちは早朝、学校へ行く前にマングローブ森に入ってカニや貝を採り、朝食のおかずを調達し、余れば近所に売って自分で小遣いを稼ぐ。豊かな海とマングローブはこの村の財産だ。」

者が戻ってきた。しかし、最近では魚介類の輸入により魚価が下がり、燃油高騰でカツオの一本釣りも減り、生贄を餌として使うことも少なくなった。
長井町と佐島町、漁の形態やこれまでの背景も異なる二つの町ではあるが、状況が急激に変わってきていることでは一致している。



浜のかあちゃんの店の前で。川名正子さん

日本の総漁獲量はかつて1000万トン以上の時もあったが、現在は600万トンを切っている。日本の沿岸で獲れる魚は魚価が高い。海外から輸入される魚とのコスト競争などで、零細漁業者は厳しい状況にある。沿岸漁業者が安定して漁業ができるようにと、30

前述の正子さんに、女性たちが地域の中でどんな活動をしているのかを聞いてみた。今取り組んでいるのは、浜のかあちゃんの店。売れない魚や捨ててしまう魚を利用して加工品を作って販売している。土日だけの開店で、外からもお客さんが来てまちが活性化するという。話を聞いている最中、正子さんの携帯が鳴る。小学生の漁村訪問のアレンジを依頼されてい

浜のかあちゃん!

取材中、佐島町で話を聞いた有限会社ヤマネの福本大さんの言葉。「これまでは魚を取りすぎていたんじゃないか」。漁村の高齢化、若者の不在、環境の変化、燃油高騰：話を聞きながら、先の見

た。魚を料理しない、食べない、という時代背景を受け、魚の開き方教室など、魚食普及や活動もやっているそう。地域のために何かをやりたい。おせっかいなたちだから考えていると色々やりたくなくなってしまふ。」という正子さんの活動は、まだまだ続いていくのだろう。

「魚を料理しない、食べない、という時代背景を受け、魚の開き方教室など、魚食普及や活動もやっているそうだ。地域のために何かをやりたい。おせっかいなたちだから考えていると色々やりたくなくなってしまふ。」という正子さんの活動は、まだまだ続いていくのだろう。

えないもどかしさを感じていた私に言ってくれた言葉だった。福本さんは、これからは沿岸漁業に特化していくしかないのではないかと考えた。地産地消、比較的農産物ではおなじみになったこの言葉。魚介類だってそう。身の丈にあった「魚食」とは何なのか。今後の漁業と漁村のあり方は、まさに食べる私たちにも問われているのだ。■

風と月を頼りに生きる漁民たち

フィリピンネグロス島の漁村から

大橋成子 / おおはし・せいこ
APLAフィリピン担当デスク

朝4時。定員4人というポボイ(44歳)の帆掛け舟でまだ真つ暗な

海へ出た。めざすはネグロス島の西に広がるギマラス海峡。ポボイは村でも評判のもぐり専門の漁民だが、彼の小さな船には手製の漁具が整然と積まれている。「何が獲れるか海に出ないと分からない。だから漁具はいつも取り揃えておく。これが俺の商売道具すべてさ。ガソリンが値上がりしても怖くない。風を頼りに漁をすればいい。」

アジアの若者と「農村再生」について考える

Rural Regeneration in Asia

吉澤真満子／よしざわ・まみこ

APLA事務局長

8月22～28日まで、韓国の京畿道キョギョドにおいて、ARENAと聖公会大学院が共同で開講しているMAINS大学院コースの夏学校に、APLA共同代表の疋田美津子さんと参加してきた。アジア各地から来た若者15名に加えて関係者を合わせ総勢約50名が集まり、テーマであった「アジアの農村再生」についての議論を行った。

日本と重なる韓国の農業状況

今回の講座は各国からゲストスピーカーを招いて講義を聴く形になっていた。韓国女性連盟創設者の一人である尹今順ユンイムさんは、95年WTO加盟以降の韓国の農業について話をしてくれた。輸入品との価格競争、政府の大規模生産化奨励により、資材投資のための借金、労働も増えた。97年アジア通貨危機の時には、倍増した借金を返済できず自殺者も出た。農産物生産の工業化、遺伝子組み換え種の導入に伴い、地域で受け継がれていた農業技術、女

性の手で保存されていた種子などが消えている。こうした中、1989年には韓国女性連盟が立ち上がる。地域の営みを守っていくためには女性の力が必要だ。農民女性の地位回復、女性のリーダーシップ育成に力を注いでいる。「地域をリサイクルさせ、人もお金も村に戻し、女性や若者が残れる村づくりをしない限り、農村再生はない」と尹さん。日本が高度成長期から徐々に進んできた農村衰退の道筋を、短時間でたどってきた韓国。現状は日本の状況と似ている。

日本が危ない!?

疋田さんの発表では、学生の反応が面白かった。現在日本の農民人口は4%。その内の60%が60歳以上だ。不耕作地も耕作可能地の内10%ある。食糧自給率は39%。「なぜ耕す土地があるのに耕さないんだ? ぼくたちは大土地所有制度やカーブ制度のため、耕したくても土地がない」と訴えたのはインドの青年だった。農民人口の少

なきについては「日本は大変危険な状況だよ。他の国をどうするかではなく、自分の国の心配をしたほうがいいのでは?」というコメントまで出てきた。カンボジアの青年は、将来ロボットが代わって食糧生産をするということとは可能か?という冗談とも取れないような質問をしてきた。現在日本では高学歴の若者が自ら選んで農民となり、地方へいくことも珍しくない。という話にアジアの若者たちは驚いたようだった。どこの村でも若者は仕事がなく都市に流れることが深刻な問題となっているからだ。農民となる生き方がひとつの選択肢となりうる。中国から来た女学生からは「私も国に戻ったら農民になってみようかな」という感想も出た。

村の価値を紡ぎなおす

バングラディシュから来たUBIN Gのファアハッドさんは、農村が壊れていくことは、全ての生活形態が失われていくことだと分析した。地域から生まれた言葉、知恵、技術、口承文化、共同体のあり方。市場も本来は社会的交換をする場所だったが、資本主義経済により、そこはただ利益を生むためのところになってしまった。では、どうやって再生をしていくのか? グロ

伝えてきた暮らしを実践する権利を

先住民民族から奪う

先住民サミット・アイヌモシリからの報告

倉戸ミカ／くらと・みか

アジア女性資料センター会員

マタオ諸島グアハン島(マリアナ諸島グアム島)の先住民民族チャモロのファナイがめざしているのは、米軍はもちろんのこと観光産業にも頼らないで生計をたてること。島の3分の1が米軍に占領されているグアハンには食物を育てる土地は十分にはないし、漁は環境保護という名のもと禁止されている。米軍で働きたくない島の若者に残された道は、観光客の9割を占める日本人向けのホテルやレストランで働くこと。

でも彼女はそれもしたくないという。占領時代を考えるとこのもあるけれど、それより何より今も観光客は、チャモロの祖先が埋葬されているところに何の断りもなく建てたホテルに滞在して、チャモロのことも、歴史のことも、米軍占領のことも、知ろうともしないで帰っていくからだという。

G8諸国と先住民

そのファナイと、G8洞爺湖サミッ



権利回復をテーマにウコチャランケ(話し合い)。

トに合わせて7月に開かれた先住民民族サミット・アイヌモシリに参加した。先住民の権利に関する国連宣言が07年9月に採択されたことを祝って、そしてG8で話される問題が先住民とどう関係するかを話し合い、先住民のメッセージをG8に届けようと、12カ国22民族が参加して、二風谷・平取・札幌で開かれた。

そこでは日本を含めたG8諸国には、チャモロやアイヌだけでなく、すべての先住民の、世代を超えて伝えられてきた知恵や技術が失われようとしていることに対する責任がある、と指摘された。「人類が自然を操り支配できる」と、そういう考え方に基づく経済成

長規範と近代化がその背景にあると。G8サミットで合意された温暖化対策も、先住民民族に及ぼす影響は大きい。バイオ燃料のために南米では、多様な食物の生産をやめて、トウモロコシだけをつくるよう圧力が高まっている。フィリピンの先住民民族カナカナイは、「地球にやさしい」水力発電のため、巨大ダム建設で、住む場所を奪われようとしている。米国でもオーストラリアでもインドでも、「地球にやさしい」原子力発電のためのウラン採掘で、健康をむしばまれ、住む場所を奪われた。私たちはやりたい放題の生活を続けて温暖化の原因をつくり出しただけでなく、そのついても先住民民族に押しつけようとしている。

先住民の権利

フィリピンの先住民民族イゴロットで、国連先住民民族問題常設フォーラム議長でもあるヴィクトリアさんは、基調講演で、今こそ先住民民族のもつ、すべての生命体に対する敬意に基づく宇宙観の生き方、暮らしを、持続可能な世界のために採用するべきだと何度も強調した。

先住民たちからG8への提言の1つめは、先住民の権利に関する国連宣言を実施し、先住民民族に影響を及ぼす

「バリゼーションへの抵抗を創り出し、自分たちの言葉、食べ物など地域の中で忘れられた価値をもう一度探し出すことだという。そして地域の中では欠かすことのできない女性農民の英知を称え、共同体の中で壊された人びと同志の関係性の再構築が必要だと話した。

農村再生とは

一週間、様々な議論が交わされた。その中で出てきた「農村再生」への糸口とは: 新自由主義が覆っているこの世界の中で小さなスペースに入り込み、人びとの関係性、共同体、協同関係をどうやって再構築していくか。農村再生は農民だけの問題ではなく、同時に「都市再生」も伴うのではないか。そして、欧米型の教育ではなく、地域の技術や知恵に価値を置いた「生きた教育」への見直し、など。昔はよかったと逆戻りをするのではなく、村が持つ総合的な価値とその重要性を改めて創り直すことがいま求められている。

〔注1〕ARENA Asian Regional Exchange for New Alternative「アジアの若者・知識人・活動家・研究者・作家・アーティストなど」構成される人々を中心とした社会変革を促すための有識者ネットワーク。
〔注2〕MAINS Master of Arts in Inter-Asia NGO Studies Group
〔注3〕UNU-NGO Policy Research for Development Alternative「ファアハッドさんはバンラディッシュ地域主体の有機農業を推進するNgajekush Andonの専務理事」

政策や投資にはこの宣言を主な枠組みとして利用することだ。国連宣言には、先住民民族が政策決定に関与できる権利(4条)、言語・文化を實踐し、次世代に伝える権利(14条)、自然資源を含め使用してきた土地を開発・統制・使用する権利(26条)などが盛り込まれている。この宣言に法的拘束力はない。しかし、それは宣言を尊重せずに、先住民民族から知恵や技術の伝承を奪ったり、温暖化のつげを先住民民族に押しつける理由にはならない。

日本とアイヌ民族

アイヌ民族の先住民民族認定を求める国会決議が今年の6月に採択された。では具体的な政策はどうする、ということも私たちは見ていかななくてはならない。すでに政府の有識者懇談会の委員にアイヌは1人だけという状況を許してしまっている。アイヌ料理屋もありなく、CD屋にアイヌ音楽コーナーもなく、雑誌やテレビ、映画で取り上げられることも少なく、日本で共に生きる他の民族に比べると、見えなくされてしまっているアイヌのことは、つい行動することをなまけてしまうのだけれど、忘れてしまってはならない存在だ。

〔注4〕http://www.ainumoshi2008.com/news.htmlを参照

03

あっちこっち 雑学手帖 02

松田麻衣子 / まつだ・まいこ
APLA事務局



家で作ってみたチャプスイ。

チャプスイ (Chap suey) は日本でいうと八宝菜のようなものだという。フィリピン、インドネシア、ジャマイカ、インド、スリランカなどでも一般的な家庭料理として存在するそれは、基本が野菜炒めであるため味付けはそう大差ないが、餡かけご飯であったり焼きそばであったりと土地によって多少その姿を変える。19世紀に移民としてアメリカに渡った中国人が故郷を懐かしんでありあわせの食材で作ったのが始まりとされ、広東語では「雑碎」と書く。雑炊や雑煮の「雑」、つまりいろんな食材を「碎」いた(細切)にした料理をいう。米軍文化の影響か、沖縄ではメジャーな料理らしい。とすれば、中国人がというより米軍が広めたと言えるのかも知れない。

上記の説以外にも、清朝末期の宰相李鴻章が米國滞在中に作らせたのだ、怪しげなアルメニア人が発案したのだ、発祥も辿った道もはっきりせず、その痕跡ばかりが散在している。アメリカ麻雀の和了役、オリエンタルな楽曲をまとめたCD、実在のレスラーをモデルにした映画、シンガポールでの日本兵の所業を描いた本…。困ったことに「チャプスイ」と名のつくものは料理に限らない。「お前ってチャプスイみたいなやつだな!」と言われたら、それは「目茶苦茶なやつだな」と言われているも同義。そう、ごた混ぜ料理のチャプスイはもはや単なる料理を超えた記号となり、中国(重慶)っぽいもの、目茶苦茶でんでバラバラなもの、チャプスイに親しんだ地域ほどその音を聞けば「あーなるほど」と合点がいく、のかも知れない。

ところで、カリフォルニア巻のように伝統的料理を異国の材料に合わせしてしまうことをチャプスイ症候群というらしい。出掛けた先で料理が舌に合わないなんてことがあったらとりあえずどこにでもある中華料理屋に入ってはどうか。そしてとりあえずチャプスイを頼んでみる。野菜炒めっぽい慣れた味の何かが出てくる。はずだ。

01



堀田正彦の アジア食い倒れ 02

堀田正彦 / ほった・まさひこ
㈱オルター・トレード・ジャパン代表取締役



これは発音が難しい料理である。スペルは「Releno ng Bangus」。頭にRが来てすぐしにつなると日本人の舌では発音ができない。さらに「ng」という鼻濁音が追い討ちをかける。「Releno」はスペイン語で「詰め物」。「ng」はタガログ語の接続詞。「Bangus」は魚の名前。英語ではミルクフィッシュ、魚類図鑑では「サバヒー」。サバヒーは中国語が語源で、フィリピンでは「バンクス」、インドネシアでは「バンテン」と呼ばれる。東南アジア各国で盛んに養殖される国民魚だ。

も呼ばれない限り食べられない。この料理を初めて目にした時はただの魚の丸揚げかと思った。しかし、輪切りにされて供されたものを見ると、外側は魚のままだが、中はポテトやグリーンピースやレーズンが混ざった魚肉のミンチであり、しっかりと味付けされている。なんとも上品なうまさである。皮はパリパリと香ばしい。

作り方は手が進んでいる。まず魚を包丁のヒラで根気よく片側ずつ叩いて、肉を柔らかくする。首の付け根に切り込みを入れ、長いヘラを差し込み、皮から魚肉をこそげ取る。中身を取り出したあと、頭と皮は傷ひとつあつてはならない。それをカラマンシー(スタモ)と醤油と黒こしょうを混ぜた汁の中に漬けておく。取り出した魚肉は小骨を丁寧に取り分けて茹でる。ポテト、にんじんは賽の目にし、醤油とニンニクをベースに、魚肉と一緒に炒める。グリーンピースやレーズンを混ぜ、ゆで卵を加えて出来上がり。これを皮の中に入れて詰めておく。元の形にして黄金色になるまで揚げする。

つまり、朝から仕込んでやっとな方に間に合うのだ。スペイン植民地時代の名残なのである。しかし、うまいのである。

フィリピン家庭料理の女王『リアノン・バンクス』

04

じゃらん じゃらん アジア 02

村井吉敬 / むらい・よしのり
早稲田大学教授、APLA共同代表

浜辺に生える木麻黄、松のような涼しげな木だ。日本の浜にも伝わってきている。オーストラリアやインドネシアには多い。英語名カシユアリーナは何だか優雅な名前だ。木麻黄はコーヒーマットのシェードツリー(日陰樹)としても利用される。日陰樹の語感とカシユアリーナの語感に似ている話がある。カシユアリーナの話をしたくないのでなく、語感がよく似たカソワリという鳥の話がしたいのである。

パプア・ニューギニアやインドネシアのパプアの村の中でこのカソワリをよく見かける。ダチョウやエミューのように飛べない鳥だ。大きさはダチョウほど大きくはないが、大きいのは背丈1メートル70センチ、体重80キロにもなるものもあるという。奇っ怪な形態と色の鳥である。羽毛は黒、赤い肉垂があり、首は青い、大きな鶏冠もある。和名ヒクイドリ(火喰鳥)は赤い肉垂からきたのだろう。

1990年、パプア・ニューギニアにおける日系企業の森林伐採問題について調査に行ったことがある。そのとき、伐採で困惑している北海岸マダンの村を訪れた。村人は伐採による河川汚染や動植物の悪影響を嘆いていた。村人の話を聞いている



インドネシアのヒラク島で飼われていたカソワリ。

とき、突然、カソワリが出現、村の中を疾駆していた。そのスピードたるやたいへんなもの、あっけにとられてこのヒクイドリを眺めた経験がある。時速50キロで走るといふ。カソワリは意外と人間に近いところにいる。大きな卵の殻をお土産でもらったこともある。奇っ怪な体と色がよく見ると可愛いし、餌付けされたカソワリは寄ってくる。カシユアリーナの枝に似た羽からカソワリと呼ばれるようになったらしい。インドネシアでは鳥も木麻黄もkasawan(カソワリ)と呼ばれている。カソワリの枝は禁漁を示す標識として海中に立てられる。

時速50キロで疾駆する鳥ヒクイドリ

02

むらを歩く ②

大野和興 / おおの・かずおき
農業ジャーナリスト、本誌編集長

明日むらがなくなっても

武州、甲州、上州、信州にまたがる巨大な山塊群がある。筆者の住む埼玉秩父地方は首都圏の西はずれに位置し、その山塊群の挑むとは口のひとつである。もう数年前になるが、秩父から峠を越えて上州群馬県に入り、信州長野県との県境の村を歩いた。

山々が連なり、集落は山々から流れ出る幾筋もの沢に沿って展開、上流に向かうと、やがて山の中腹にへばりつくように存在する集落に至る。そのひとつ、標高800メートルのところにある集落、上野村奥名郷を訪ねた。そこはかつて30戸余りが暮らしていた。現在は6戸。かつての三分の一になっていた。一人暮らしが3戸、夫婦二人が3戸。人口は9人、全員70歳を超え、みんな寄り添って生きていく。一日に一度はみんなで集まり、お茶を飲んで話し込む。都会に出て行った子どもたちからは、早く山を降りていっしょに住もうといってくるが、みんなここを離れる気はないという。

週に一回、小さなスーパーマーケットのような小型トラックの移動販売車がやってくる。音楽を鳴らして車が来ると、みんな集まってくる。運転手兼売り子のお兄さんと話し、買いたい物をするのが楽しみなのだ。ヤ



急斜面にへばりつく家と煙。

クルトの配達週3回、郵便配達さんが毎日午後3時ごろ、郵便物と新聞を持ってくる。小さな旗を軒先に出しておくと、手紙や書留など郵便局へ持参するものも持ってきてくれるし、ちょっとした買物も頼まれてくれる。

イノシシ困いをした急傾斜の畑はどこもきれいに耕され、お年寄りたちの勤勉振りを教えてくれる。ぶしつけな質問をした。

「このむらはいつまでもちますかね」

みんなアハハと笑って、「明日なくなってもおかしくないやね」と応じた。アハハと笑って生きるしかない現実を見据えた人生の重みがずしんと胸に響いた。あの村はまだあるだろうか。

【事務局だより】

編集後記

鷺尾圭司さんの話を、酒を飲みながら聞いたことがあります。どこの海にどんな魚がいて、こうやって食べるとうまいとかまずいとか、話は実に具体的でおもしろく、時間がたつのを忘れたほどです。その鷺尾さんに、日本の漁業と漁村の今とこれからを語っていただきました。(大野)

新しくオープンしたAPLA /あぶらのホームページには、ハリーナの写真をカラーで見られるページを設けました。白黒だと伝わりにくい写真もカラーで見ると楽しいものです。特に、今回掲載の村井吉敬さんのコラムに出てきたカソワリの写真は一見の価値あります。(吉澤)

メインテーマが漁業とはいえ、奇しくも魚の話題が多くなった今号。これに乗じて拙コラムでも何か魚ネタを持ってくるんだっ！と気づくも既に後の祭り。しかしチャプスイはイカやエビを入れてもおいしそうです。強みは味の予想と自己流が簡単どころか。(松田)

ハリーナ HALINA

2008年秋号 vol.02-no.02
2008年11月1日発行

【編集長】
大野和興

【編集者】
吉澤真満子、松田麻衣子

【表紙写真】
長倉徳生

【イラスト】
保光美由紀

【デザイン・制作】
十年舎

【編集・発行】
特定非営利活動法人APLA
(APLA/あぶら:Alternative Peoples Linkage in Asia)

〒169-0072
東京都新宿区大久保2-4-15
サンライズ新宿3F
tel. 03-5273-8160
fax. 03-5273-8667
e-mail info@apla.jp
URL http://www.apla.jp

【印刷】
株式会社セイズ

APLA web siteでは、本誌に掲載されている写真の一部をカラーでご覧いただけます。
http://www.apla.jp/04/04_halina.html

事務局の動き(2008年7～10月)	
7月 24日～31日	APLA会員・グリーンコープ共同体の青少年ネグロス体験ツアーを行い、大橋、吉澤が同行しました。
8月 22日～28日	韓国の聖公会大学院・大学院コースMAINSの夏学校に、共同代表・疋田さんと吉澤が参加しました。(詳細8ページ)
8月 23日～29日	共同代表・秋山がネグロスを訪れました。ネグロス島のパートナー組織NBAなどを訪問しました。今回は北部ルソンからCORDEVのグレッグさん、トマスさん及び韓国からドゥレコープの金さん、アンジェラさんが一緒でした。APLA、ネグロス、北部ルソン、韓国との間で意見交換が行われました。
9月 21日～26日	東京経済大学現代法学部・渡辺龍也先生のゼミ生たちのネグロス島ツアーがありました。大橋がアテンドしました。
10月 4日～5日	東京・日比谷公園で行われた“グローバル・フェスタ”に参加しました。
10月 19日	反貧困ネットワーク“世直しイッキ!大集会”に、ATJ、at編集室と共に参加しました。日本の貧困とフェアトレードについて、こもればこーヒーさんと一緒に話してきました。
7月17日、8月21日、9月18日、10月16日	APLA民衆交易・フェアトレード研究会開催

- APLAの正式ホームページを立ち上げました。ご覧ください。《http://www.apla.jp》
- 8月からネットショップを始めています。どうぞご利用ください。《http://www.apla.jp/shop》
- APLA英文ニュースレター (APLA Newsletter Vol.1 No.1) を発行しました。APLAのブログでご覧になれます。http://apla.press9.net/

事務局からお知らせ

10月1日から特定非営利活動法人になりました!
5月17日に行われた設立総会后、東京都へ認証申請し、10月1日に「特定非営利活動法人APLA」として登記しました。これに伴い、会費や募金、販売物支払いの口座などが変更になりますが、別途会員の皆さまにはご連絡いたします。

東ティモールのブックレットができました!
東ティモールというどんなことを想像しますか? 独立闘争、貧困、フェアトレードのコーヒーなどを思い浮かべる人が多いのではないのでしょうか。もっと身近に東ティモールを感じてもらえるようなブックレットを作りました(1冊200円)。ご利用の方は事務局までお問い合わせください。教材などにも最適です。

12月14日、新宿御苑でアース・ビジョン事務局と共同で映画上映会を行います。
〈食・映像から見るもうひとつのアジア〉
ネグロス島の砂糖キビ労働者を追った「死の季節よ、さらば」、エビの生産現場を追う「エビの履歴書」、津波被害を最小限におさえたマングローブ林、砂丘、サンゴ礁について撮った「自然の橋」。3本のドキュメンタリー映画上映に加えて、APLA企画のトークショーを行います。
トークショー: 村井吉敬さん(APLA共同代表)× 谷洋一郎さん(南伊豆百姓)

APLAでは会員さんへメールマガジンを配信しています。
APLA会員限定のメールマガジンを不定期に配信しています。まだ登録されていない方はぜひ登録してください。事務局までご連絡下さい。

「互恵のためのアジア民衆基金」設立準備のための国際会議を開催
この「基金」は、APLA共同代表・秋山真兒、(株)オルター・トレード・ジャパン社長・堀田正彦、そして生活クラブ、グリーンコープ、パルシステムの各生協、大地を守る会、日本消費者連盟及び韓国・ドゥレ生協の代表者の呼びかけで設立準備が進められています。「基金」の設立目的は、①アジアにおける市民・民衆のネットワーク形成と相互交流と地域開発のための提言活動、②オルタナティブな市民・民衆金融事業。その設立準備の国際会議を08年11月8日～9日に福岡で、フィリピン(ネグロス、北部ルソン)、インドネシア、東ティモール、パレスチナ、パキスタンのNGO等の代表を招いて開催されます。

北部ルソンにおける鉱山開発問題に関する報告です。
ルソン島の北部に位置するヌエバビスカヤ州は、農業のみならず、金、銅、マンガン、クロマイトなどの天然資源も豊富な地域だ。その豊富な天然資源をねらって、外国資本の大企業が入り込んでいる。たとえば、オーストラリア資本の Royalco Resources社はコンコン渓谷のあるカシブで約5900haの探査許可を得ている。他にも英国やニュージーランド資本の企業が許可を取得済みで、現在許可申請中の企業も数多く存在する。

こうした企業による大規模鉱山開発は、影響を受ける先住民コミュニティやCORDEVなど地元グループからの激しい抵抗に直面している。わたしたちは、もし大企業の操業を許したら、環境破壊や立退き、食糧不足、先住民の文化の破壊など、地域に対して非常に大きな負の影響が



鉱山開発会社の機材侵入に反対する人間の盾。

出てくるだろうと考えている。そのため、鉱山開発会社の車両や機材が探査地域に侵入するのを防ぐべく、地域住民とともに道路封鎖や人間の盾といったデモを行ってきた。実際に、カシブの9つのバラングイ(最小の行政単位)の住民が、Royalco Resources社の探査機材がバラングイ・パケットにある操業地区に搬入されるのを、一年間に渡る人間の盾で阻止したという成功例もある。

それに対して、企業側は軍や民間の護衛兵など、暴力によって平和的な反対行動を解散させようとした。また、鉱山開発に反対するコミュニティの指導者を訴えるという手段にもでており、その訴訟は現在も継続中である。さらに、企業に対して農地を売却することを強制された家族がいくつもある。

現在CORDEVでは、大規模な鉱山開発が引き起こす問題と影響に関して、一般の人びとの意識を高めることに焦点をあてている。そうすれば、破壊的な鉱山開発から人びとの権利を守るための効果的な戦略が見出せるはずと期待しているからだ。企業は、地元住民に配慮するべきだし、補償は、包括的で持続可能なものでなくてはな

From East Timor【東ティモールより】 エルメラ県ファトゥベシのコーヒー農園における土地問題の話が届きました。

1999年以来、エルメラ県ファトゥベシのコーヒー農園に含まれる5つの村の住民たちは、「これまでプランテーションとして支配されていたコーヒー農園は、ポルトガル植民地時代以前には彼らの先祖が所有していた土地である」と主張し、住民メンバーで分け合う土地改革を行ってきた。

ファトゥベシでコーヒー生産が始まったのは、ポルトガル時代初期、セレスティノというポルトガル人がコーヒー苗の育成を始めたことに起因する。そして、徐々に地区を広げていき、地元指導者に対して、住民の土地をポルトガル人の事業のためにあけ

たすように強制した。インドネシア時代には、1980年(82年までカルヤ・マクムル社によってコーヒー加工が行われ、その後82年～96年まではサラザル社が加工事業を行った。両社ともインドネシア軍の支援を受けていた会社である。そして、国連による暫定統治期にファトゥベシの農園は放棄され、事業として加工をするものはいなくなった。それをチャンスとしてとらえた農民たちは皆で農園を分け合った。2000年～03年にかけてファトゥベシのコーヒー農園は東ティモール政府によって、シンガポール資本のティモール・グローバル社に売却される予定だったが、地元の人びとは現在まで強く抵抗、グループもしくは個人的な生産が続けられている。 ■

(抄訳・事務局野川)

害関係者が納得できる条件での合意が必要とされている。

〔注〕CORDEV
農村発展のための協組(APLA)
あぶらの北部ルソンのパートナー団体。